

ジャクソニアン・デモクラシーと銀行戦

櫻井, 東樹

<https://doi.org/10.15017/2339003>

出版情報 : 史淵. 45, pp.101-126, 1950-11-15. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :



ジャクソニアン・デモクラシーと銀行戦

櫻 井 東 樹

目 次

- 一 序 論
- 二 銀行 戦
- 三 拒 否 教 書
- 四 労働党について
- 五 結 論

一、序 論

ジャクソニアン・デモクラシーは通常、一八二九年から一八三七年の間、新たに参政権をえた民衆をひきいる移り気の大統領アンドルー・ジャクソン(Andrew Jackson)によつて影響を及ぼされた急激な変化に基因するものと考えられている。⁽¹⁾ 他方マック・マースターはジャクソンの勝利をデモクラシーの凱歌とみ、ターナー(Turner)はそれをフロンティア(Frontier)と西部(West)との勝利であるとし、シュレシנגガー(Schlesinger, Jr.)は東部的要因を力説⁽²⁾

ジャクソニアン・デモクラシーと銀行戦

している⁽⁴⁾。しかるに最近これらの諸説に対して批判の声があげられ、特に賃銀労働者論 (Wage-earner thesis) をめぐつて新たな問題提起が試みられるに至つた⁽⁵⁾。

いうまでもなくジャクソニア・デモクラシーの当面した課題は、西部の発展とセクション (section) の利害対立とを背景にして複合的、相関的な系列をなしてをり、したがつてジャクソンの業績は多方面にわたつていたが、そのうち最大にして且ジャクソンの性格を最も明瞭にあらわしているものは銀行に対する攻撃であつた。銀行戦においてもわれわれは二つの主張に遭遇する。「合衆国銀行とジャクソンとを闘争に持ち込むべき何物もなかつた。彼の反対の動機は政治的であつて、経済的ではなかつた。……彼は政治上の主義さえ持つていたとみることは困難であつた⁽⁶⁾。」とゆうように、大企業に反対する田舎じみた偏見ある人々を政治にひき入れたにすぎないとする説に対し、ビアード (Beard) は銀行戦を「一般に農民・職人 (mechanics) ・労働者 (laborer) と、法律家・商人・企業家・上層実業家・教授との間の闘争⁽⁷⁾」と解した。またシュシレンガー (J.) は、ジャクソンが硬貨観 (hard money) をもつていたので、"humble members of society" のための一貫した方策に結晶したと断言する⁽⁸⁾。以上の如く提唱された諸説に対する解明を試み、銀行戦の意義を考察しようとするのが本小論の目的である。

(一) この序論の要はすでに論者が「史淵」(一九四九年二月、第四〇輯、一九四頁)において発表したものである。Arthur M. Schlesinger: *New Viewpoints in American History* (1928), p. 200 参照。また Thomas P. Abernethy, "Andrew Jackson and the Rise of South-Western Democracy," *American Historical Review* XXXIII (1927-1928), p. 76 以下「チャクソンは行動の人であつた。また実業家は御都合主義者になり勝ちであつた。彼は確に御都合主義者であつた。」と結論し

- (2) John B. McMaster: History of the People of the United States (1900) p.518.
- (3) Frederick J. Turner: The Frontier in American History (1920) 447 Rise of the New West (1819—1829) [The American Nation, A History Vol.14] 參照。
- (4) Arthur M. Schlesinger (Jr.): The Age of Jackson (1945).
- (5) William A. Sullivan, "Did Labor Support Andrew Jackson?", Political Science Quarterly LXII (December 1947); Edward Pessen, "Did Labor Support Jackson? The Boston Story" Political Science Quarterly LXIV (June 1949); Joseph Dorfman, "The Jackson Wage-Earner Thesis," American Historical Review, LIV (January 1949); Water E. Hugins, "Ely Moore: The Case History of a Jacksonian Labor Leader" Political Science Quarterly LXV (March, 1950).
- (6) Abernethy, op. cit. pp. 76—77 において結論的に「ジャクソンの伝統はその人々（南西部の小農民）に深く根ざしてゐたし、ジャクソンの銀行政策はその人々にデモクラシーのようにみえた」と述べる。日高明三著「ジャクソニアン・デモクラシー」（一九四八年）一〇二—一〇三頁に「西部農民と東部の労働者との強烈な情願の的になつた事情には、われわれの経済的事情からみれば不可解な点が少くない。そして銀行を倒壊させたジャクソニアン・デモクラシーの圧力のなかには理不度とめづらなき要素が少くなかつたようにみえる」と述べてゐる。
- (7) Charles A. and Mary R. Beard: Rise of American Civilization (1934), I, pp.542, 573, 580.
- (8) Schlesinger (Jr.), op. cit. pp. 115, 142 において大づかみに「ジャクソニアン・デモクラシーが商業社会と他の社会との間の絶えざる闘争の一局面であるとし」、「労働を向上させる 最善の道は急進的デモクラシーの経済計画を制定することであつた。」と主張する。而してその序文に、「ジャクソニアン・デモクラシーの発展は合理的にして組織の見解から、而

もその支配的信念と動機は多くのものは西部より寧ろ東部と南部からでている」とゆうセンセーションをまき起した一節がある。

二、銀行戦

そもそも、ウィリアム・マクドナルドをして、第二合衆国銀行⁽¹⁾の破壊は、一般に合憲法性・経済的有用性が認められた制度への突然にして是認されない攻撃であるより寧ろ、ジャクソンを大統領にした民主革命の当然の帰結であつた⁽²⁾——と云わしめた「民主革命」(Democratic revolution)とは如何なることを意味したのであろうか。

まずわれわれは、いわゆるケンタッキーの救済戦(Relief War)においてすさまじい光景を呈したように、州銀行紙幣の駆逐によつて南部と西部の永続せる反対を見出す⁽³⁾。カーマン(Carman)の言をかりれば、「政治家・農民・投機家——inflationist all——は、安価な紙幣(easy money)を求めて銀行を非難⁽⁴⁾」のである。このようにわれわれは銀行に対する憎惡の源を通貨にみる事ができるのであるが、而もわれわれが「第二合衆国銀行についての議会の報告⁽⁵⁾」を手にする時、通貨の社会的弊害が説かれながらも現在の銀行の役割が是認されているのに対して、グーチ(Gouge)の論説は銀行紙幣の一时的過剰が商業企業の及ぶあらゆるものへの弊害を主張している。此の二資料を通じてわれわれは、なにか商人的臭みと、彼等の立場を擁護せんとするあがきとを見る。ところが「合衆国銀行についての演説」の五項目に、銀行の小資本家には望ましくなく、労働者には有害であることに言及しており、またハッカー(Hacker)によつて、「制約されない通貨は負債の無秩序な回収、無組織の価格、激化された望ましくない投機の膨張を可能にした。結局、商業貴族主義の力の基盤であつた」⁽⁸⁾とその特権的性格が指摘され、ここにわれわれは

銀行への攻撃が経済的色彩のものから政治的なそれへと移行するのを見出すのである。これまで述べてくると、銀行に反対する要素に二種あることが明瞭となる。すなわち西部と南部においては、州銀行の活動の閉鎖をきらつた *soft money men* によつて、また東部においては、その割引と紙幣発行のために *hard money men* によつて、攻撃が行われたのである。かかる両地域の不満にたいして、ジャクソンは如何に対処したであらうか。

(1) これは一八二二年の戦争の経験によつて、一八一六年四月一〇日に、二〇年間の特権を与えられ、フィラデルフィアに本店をおいた。この銀行は利子を支払ふことなしに政府預金を処理し且課税されなかつた。一八二三年にニッポル (Nicholas Biddle) が総裁の職につくや、その財政は保守的線にそつて確立され、紙幣流通の拡大も法的限界的に保たれた。この銀行に対する非難の多くが根のないものであつて、その成功が却つて反感を惹起したともいわれる所以である。

(2) William MacDonald—Jacksonian Democracy (The American Nation, A History Vol. 15), p. 118.

(3) Schlesinger (Jr.), op. cit., p. 304-42; Fred A. Shannon—America's Economic Growth, (1940) p. 288. 「一八一九年の恐慌は銀行の戸口を驚かせた。憎惡の遺産は銀行が存在する限り、西部と南部の負債者地域にうけつがれた。」

(4) Henry J. Carman: Social and Economic History of the United States, II, (1934), p. 161.

(5) The Staff, Social Sciences I. The College of the University of Chicago, ed.: The People shall judge—Readings in the Formation of American Policy. Vol. I, p. 602—618, "Congressional Report on the Second Bank of the United States." 地方銀行からの金貨支払の強制に成功したこと及び銀行の破壊に乗じて商人・企業家・農民から更に大資本家に富が移ることを論じてゐる。

(6) The Staff, op. cit., pp. 630—638, "William H. Gouge: History of Paper Money."

(7) Louis Hacker: The Triumph of Capitalism, (1949), I, pp. 370—423: "Speeches on the Bank of the United

States."

(8) Louis Hacker, op. cit. p. 343. またこの点について A. M. Schlesinger (Jr.), op. cit. p. 409 に「負債者地域として西部は当然安価な紙幣を欲した。銀行に対するケンタッキー戦の謎は紙幣制度でなくて、外部的統制であつた」と新見解をのべている。

さて、ここでわれわれは一八二八年におけるジャクソンの当選をめぐる、三セクションの担い手である農民・労働者・農園主の立場を検討する必要があると思う。問題の焦点は、北東部の労働者 (Laboring men) の投票が南東部及び西部におけるジャクソンの追隨者に附け加えられなかつたならば、大統領に選ばれなかつたであらうという主張の当否に存在する。これに対してペッセン (Pessen) は「富者と貧者との間の抗争ではなかつた。ポストンにおいて、ジャクソンは支持者を have-nots と不満な上層階級——抱負ある商人と失望せる連邦黨員からえたのである。」と云う。そこで一八二八年の大統領選挙人投票 (electoral vote) をみると、ベンシルヴェイニアの二八の総得票とニューヨークの三六の中二〇の得票は、その結果を magnify⁽³⁾したのである。

ジャクソンが西部の叛乱によつてのみ選ばれたとか、労働階級のみによつてとゆうような印象は支持できない、分離にせよ結合にせよ、これらの要素は小數党である。ジャクソンは新西部とソリッド・サウス (Solid South) とを獲得した。しかし彼の方向に一層多く旋回したのは margin of independent votes であつた⁽⁴⁾と云うロング (Long) の主張は適切であらう。すなわち一八二八年の選挙の勝利は一政党ではなかつた。凝集の要素は指導者であつた。……人々はジャクソンの周囲に結合され、彼は計画を代表したが故ではなくして、何事かを代表したが故に⁽⁵⁾。事実、一八

二四年と一八二八年の州の全投票を比較すれば如何に国家が徹底的に動き出したか、如何に堂々と延び抜がつたかを示されている。⁽⁶⁾その理由についてフォークナー (Faulkner) は (a) 普通選挙の普及 (b) 参政権が商人・小経営者東部諸州の中産階級に及んだことをあげ、ジャクソンは特権階級 (商業利益) に対して、民衆 (農民や労働者) の擁護者であつた⁽⁷⁾と主張する。シャノン (Shannon) も亦、此の選挙は労働界にまきおこつた激昂の單なる象徴であつたと結んでいる。これに対してマクドナルドの、「ジャクソンの銀行への予期しない攻撃が、たとえその制度に対してであろうと、味方に対してであろうと、南西部及び南部の一般民衆にとつて、予期しないものでも歓迎しないものでもありえなかつた。」⁽⁸⁾とゆう言明の裡に眞実の一部が語られていると共に、われわれはまたそれがターナーの見解に偏していることをも指摘することができよう。むしろシュレシンガー (T. S.) の「小額のかなり固定した収入ある人々——農民・労働者・職人・小商店主、汎山の南部の農園主——が、儲けることも支配することも出来ない、挫折させ惡意ある経済的要因の犠牲であると感じた。」⁽⁹⁾とゆう包括的叙述こそ事實を説明していると思ふべきであらう。されば一八二九年の第一次年次教書において、

「あらゆる公職の責務は極めて平明で簡單なるが故に、理解力ある人々 (Men of intelligence) はその發行に資格づけられよう。官職が国民のためにのみ設けられている国では、如何なる人も他の人より以上に官職の地位への本質的權利をもつものではない。」⁽¹¹⁾と述べた一節について、ジャクソンは彼の支持者の間のあまねき情緒を表現したのであつた。中庸 (Mediocrity) は、民衆がより高い水準に昇りえないならば完全な平等へ払われた価格の一であつたと批評される。⁽¹²⁾このように考察を進める時、一般に西部の農民、東部の労働者、南部の農園主とセクション的に概括されるけれども、重点は寧ろ中産階

級の政治的役割にあるのであり、したがってジャクソンの当選は参政権の普及の裡に、経済的憤懣、政治的圧迫に抗する旺盛な民衆の叫びを一身に具現したものと見るべきであつた。⁽¹³⁾

このような背景が確固と築き上げられるのを待つたものがジャクソンであつたことは、彼の年次教書の文面を忠実に辿ることにより明らかにされるであらう。即ち第一次の教書⁽¹⁴⁾は銀行を公然と攻撃したが、まだ全力を傾けてはいない。第二次、第三次の教書においても巧みにその主題に言及しながら、啓発された国民とその代表者の調査に問題を残している。かくて反対側が思慮ある沈黙を保つたならば衝突はさけられたであらう。

しかし不賢明にも總裁ビッドルはクレイ (Clay)、ウェブスター (Webster) の意見に支持され、特許状の更新を決心した。⁽¹⁵⁾ その上、調査に対する不承不承の態度は銀行が不健全である⁽¹⁷⁾とゆうジャクソンの信念を強化し、やがてジャクソンの意見は国民の意見の反映とも見なしうる情勢となつた。かくして合衆国銀行特許法案⁽¹⁸⁾が拒否されるであらうとゆうことが期待されるに至つた。

(1) Arthur M. Schlesinger, op. cit., p. 209. 参照 Shannon, op. cit., p. 234 参照。

(2) Pessen, op. cit., pp. 265—266.

(3) Edward Stanwood: The Presidency of the American History (1898), p. 149.

(4) J. C. Long: The Liberal Presidents (1948), p. 51. Richard Hofstadter: The American Political Tradition (1948), p. 54 に「彼の選挙は経済上の革新のための委任ではなかつた。如何なる財政上の変化、合衆国銀行に対する十字軍も約束されなかつた。」と述べている。

(5) John A. Krout and Dixon R. Fox: The Completion of Independence 1790—1830 (1944), p. 167.

(9) Stanwood, op. cit., pp. 136, 148 によれば、一八二四年には三五五、〇〇〇の popular vote であるが、一八一八年には一、一五五、〇〇〇と増大した。人口は二倍に達しなかつたが、投票数は三倍を示している。

(7) Harold U. Faulkner and Tyler Kepner: *America, its History and People*, p. 211.

(8) Shannon, op. cit., p. 234.

(6) MacDonald, op. cit., p. 116.

(10) Schlesinger (Jr.), op. cit., p. 120.

(11) Krout and Fox, op. cit., p. 9.

(12) James T. Adams: *The Epic of America* (1931) p. 148.

(13) Beard, op. cit. p. 566. 參照

(14) MacDonald, op. cit. p. 125—129. 二九年末の第一次年次教書に先だつて、一八二九年一月にビッドルに手紙を送り「議会がロロンビヤ地区以外に銀行を特許する権利をもつと考へない。私は貴下の銀行を他の銀行以上に嫌惡するわけではない。けれども私は『南海泡沫会社』の歴史を讀んでからとゆうもの、銀行なるものに恐怖心を感じる」とその氣持をつたえている。換言すればジャクソンを激せしめたのは、このような銀行一般への反対であつて、この特殊な銀行へのそれではなかつたとも考えられる。

(15) Beard, op. cit., p. 125—129. なおジャクソンを更に激せしめたのは、銀行の支店がジャクソンの選挙を妨害した若干の兆候であつた。

(16) The Staff, op. cit. © Samuel Smith 及び Charles J. Ingersoll への書簡にビッドル自身「銀行は選挙に関係なく、又 "I am for the Bank and the Bank alone" と所信をのべてゐる。このビッドルがやがて反動化するに至る。

(17) Shannon, op. cit., p. 288. 当時の状態は次の如くである。一八三三年合衆国銀行紙幣の二〇、〇〇〇、〇〇〇弗は流通總

額の半であつた。任意に国家の法貨をも減少し、その半分の再膨張することができた。ピッドルは貴族主義的で、あらゆる銀行官吏とその二九の支店は彼の気まぐれにも服した。彼は民主政治に全く信念を抱かず、恩にさせる態度と輕蔑でジャクソンを眺めた。一八三三年迄に、州銀行の数は五〇二に達し、その中八八を除くすべては東部にあつた。ニューヨークにおける銀行資本は二八、〇〇〇、〇〇〇弗に達し、マサチューセッツにその半があつた。各人について見ると、西部の通貨の二弗に比して、東部の通貨は九弗であつた。合衆国銀行は東部の強力な州銀行と競争するようなことはなかつた。その代り、主要な流通は西部と南部であつた。

(18) 一八三二年一月上院に提出され、六月三〇日に兩院を通過し、七月四日大統領に送附された。

三、拒否教書

「富める人、有力な人が利己的目的のために、あまりにも屢々政治の行動をまげたのは残念なことである。社会における差別はあらゆる公正な政治の下に常に存在するであらう。才能・教育・富の平等は制度によつて産みだすことは出来ない。神の恩恵、卓越せる産業の成果、経済、有徳の全き享受において、あらゆる人が平等に法律によつて保護さるべく資格づけられている。しかし法律がこれらの自然にして公正なる利得に人工的差別をつけ加え、且つ称号、賜物、独占の特権を与えて、富者を益々富ましめ、権力者を益々有力ならしめようと企てる時、the humble members of society-farmers, laborers (彼等は自分たちに同様の恩恵を確保する時間も手段もたない)——は彼等の政治について苦情を云う権利をもつ。政治に必然的に起る弊害なるものはありえない。その弊害は濫用においてのみ存在するのである。もし政治が公平に保護されるように限定されるならば、また神が雨をめぐむように、その恩恵が高きにも低きにも、富めるも貧しきも、同じようにそぐならば、それこそ制限されない賜であらう。われわれの政治も、われわれのユニオン(Union)も、数州の権利や力の侵略によつて維持もされず保持もされない。かくしてわれわれの General Government を強化する企図が却つて、それを弱化する。眞の強さは個人と州とを出来るだけそのまゝに存置すること—in making itself felt——に存するのであつて、その権力においてではなくその利益において、またその支配においてではなくその保護においてであ

り、また州を密接に中心に結びつけることなくして、適当な軌道に障礙でないように各々を動かしめることに存するのである。……」
このような罵言、惡口——明白にジャクソンの語法でなくて彼の權威を帯びた——は政治における新たなものとして *note of class distinction* と ⁽²⁾ *モング* は呼び、ヘイル (Hale) は、先駆農民 (pioneer) は金權をにぎる東部銀行家に対するジャクソンの戦に喝采を送つたと述べ、それがセクションではなくして、*class war* であると断じている。
またシュレシンガー (H.) は、銀行戦は *conflict of classes* について再び熟考するよう国民に強いたと述⁽⁴⁾べ、ビッドルやウエプスターのような人々が、投機的経済を好んだことを指摘し、明白に *working class* が紙幣により欺むかれたとゆう階級的対立の面と共に、東部的要因を重視している。そもそもジャクソンの “*make the rich richer and the potent more powerful, the humble members of society……*” は何を意味したのであるうか “*Bank Veto* は階級闘争の文書であろうか。これこそわれわれの究明すべき問題である。

民主党の一機関紙によると、「第二の独立宣言⁽⁵⁾」であつた拒否教書が公にされるや、さまざまの非難が投げつけられた。けれどもジャクソン時代の告発は、敗北せしめられ、やけになつた政党内からのものであつた。しかも部分的には *frontiersman* と *Indian fighter* に関する疑惑によつてであつた。⁽⁶⁾ またビッドルの反動化の転換点は拒否教書に求められているが、クレイへの書簡は如何に保守主義者が反独占論を受け入れたかを示している。⁽⁷⁾ 保守主義者は云う——階級の压制でなく、行政上の压制であつた。根本的闘争は搾取者と被搾取者との間ではなくして、統治者と被治者との間であつて、自由の主要な脅威は富豪階級からでなくて、官僚階級からであつた。国民は立上り、富についてでなく政治について、虚飾を叱責するであろう。⁽⁸⁾ と。たしかにジャクソンは強力に統治し、先任者以上に拒否力を使

用した。拒否教書は果して大統領の専横であらうか。その意図はどこにあつたのだろう。

さて一八三一年の「ベントンの演説」⁽⁶⁾の要旨の若干を列挙したのが拒否教書であるが、これには経済的、社会的議論よりも、政治的面が強く出ているのをわれわれは見出す⁽⁷⁾。而も教書の最後に展開されたように、銀行への批難は実質においてその特徴の故に、危険な独占 (monopoly) だとううにあつた⁽⁸⁾。われわれは集中とか独占とかの発生する根源を産業主義にみる。シュレシンガー (J. S.) はこの時代を新たな機構に対する大規模の調節とみ、銀行は生産階級から金権家に富を移輸するものであり、経済的必要よりも政治的必要に応ずべく設立されたと指摘する⁽⁹⁾。ハッカ―も「沿岸地方労働者が銀行戦において、ジャクソンを支持したのは Monopoly の敵としてであつた⁽¹⁰⁾」と主張するが、カーマンは西部的通貨に重点をおいて、「政治家・農民・投機家——inflationist all——は安価な紙幣 (easy money) を求めて銀行を批難した。そして拒否教書において、北東部の資本家が西部や南部の国民の犠牲において富を蓄積した⁽¹¹⁾」と述べている。

かくて独占と資本主義的結合とにたいして本能的反対を表わし始めていた民衆にとつて、合衆国銀行は彼等が恐れた弊害の重要にして、最も熟知の例証として理解され、且つ独占は彼等が正しく評価した議論の形式であつた⁽¹²⁾。ここに東部の hard money と西部の soft money との矛盾に対決するために、(a) 違憲 (b) 個人支配下の集中の叫びによつて訴えた。実は銀行に対する反対は、テイニー、ベントン、グーヂ (Gouge) などの hard money men から出ていたのであるが、ジャクソンは銀行に憎惡を抱くすべての敵が結合しうる論議のみをとり上げたのである。かかるジャクソンの政治的力量と定見とを認識した点で、ハッカーの觀察以上にシュレシンガー (J. S.) の次の敘述はすぐれ

ていると思われる。「銀行についていえば、ジャクソンは西部——重要な反銀行感情が東部支配から解放されたクレディットと紙幣への要望からでた——において。彼の硬貨観が誤解されるのを許さねばならなかつた。換言すれば、彼は拒否をデフレ行為より寧ろインフレ行為と見做した人々によつて大いに支持された。」⁽¹⁶⁾ それ故に *resounding and demagogic language* に満ちてゐた、しかし「それはその目的に役立つた。」⁽¹⁷⁾ と “humble members of society” と “the rich and powerful” の間の区別は両階級から速かな反応を惹き起した。全国を通じて *common man* は指導者の訴えに熱烈に反応した。ジャクソンが漠然たる対象に *Monopoly* を以て当つたことは、大統領職が成長した時には曖昧に表わされているが、大統領の権力が大いに国民の *main body* と密接な關係にあつたことに依存する事実を把握しなければならぬ。⁽¹⁸⁾ 国民から委任を受けたとゆう信念は、一八三二年の選挙において、二一九対四九の圧倒的勝利を以てクレイを打倒するに至つた。ところで戦を挑んだビッドルの手段は疑わしいものであり、やがて恐慌と共に銀行の貸附金は乱脈に陥つた。彼はジャクソニアンを攻撃する地盤を誤解し、⁽¹⁹⁾ 大統領が国民に述べた時、單なる煽動家として説明を無視した。ここにわれわれはジャクソンとは対照的な *wicked wealth* に墮した典型的人間ビッドルを見出し、激変期の歴史の舞台における運命の皮肉を感じるのである。

(1) The Staff, op. cit. p. 618—628, “Veto of the Bank Renewal Bill.”

(2) J. C. Long, op. cit. pp. 55—56.

(3) William H. Hale: The March of Freedom (1947), p. 13. これが「アレゲイニー山脈をこえたバイオニアなる語が示しているように、ターナーの色彩において眺めてゐる。」

- (4)(c) Schlesinger (Jr.) op. cit., p. 125.
- (e) Arthur M. Schlesinger: Political and Social History of the United States, 1829—1925 (1926), p. 5.
- (7) Hacker, op. cit., p. 415; Schlesinger (Jr.): The Age of Jackson, p. 92.
- (8) Schlesinger, op. cit., pp. 275—276.
- (9) Hacker, op. cit., pp. 414—415 註解を参照せよ。
- (10) Hacker, op. cit., p. 343.
- (11) Schlesinger (Jr.) op. cit., p. 289.
- (12) Schlesinger (Jr.) op. cit., pp. 334, 336 — 337.
- (13) Hacker, op. cit., p. 416.
- (14) Carman, op. cit., p. 161.
- (15) MacDonald, op. cit., p. 131.
- (16) Schlesinger op. cit., p. 206.
- (17) Hacker, op. cit., p. 415.
- (18) McLoughlin, op. cit., p. 415.
- (19) Stohsinger (Jr.) op. cit., pp. 113—114. 「タフのために運動文書として銀行拒否の三〇〇〇部の発行を命じており、また一八三三年の夏まで、ジャクソンの秘密の目的が彼自身の新国家銀行を建てることであると信じていた。」

四、労働黨 (Workingmen's Party) についで

一八三〇年八月に組織された労働黨は、自己の矛盾の経済的基盤に殆んどふれなかつた。⁽¹⁾ ジャクソンニアン⁽²⁾の運動はその矛盾が教会と州との陰謀、free education、負債投獄の廃止でなくて、富の問題であることを決定的に記憶させた。⁽²⁾

而かもシュレシンガー(Jr.)は、独占の憎惡と common man への共鳴は、教養ある紳士がジャクソニアン・デモクラシーの戦場に見出した理性の魅力的表現となり、それはやがて、「銀行戦の間に、労働者(laboringmen)が彼等の指導者として彼の政党へ漸次転向し始めた。」とするのである。この言明がベッセン及びサリヴァンにより論議的とされた。

われわれはドーフマンにより提起された問題を手掛りとして、シュレシンガー(Jr.)の説く所に検討を加えよう。

(A)所謂 radical leader は眞に radical であつたか。(B)所謂 workingmen's movements and parties は眞に wage earners の問題であるか。シュレシンガー(Jr.)が "politician and middle class intellectual" としてあづるシチウイク(Theodore Sedgwick)について考察すれば、拒否教書を契機として「改良の主目的は独占の破壊であつた。」と主張するのに對し、ドーフマンはその転換を否認する。次にアレイン(Samuel C. Allen)によつては、「一八三〇年に合衆国銀行へのジャクソンの政策を是認し、且つ一度だけ生産階級が政権を支配するのを望むことを公的に宣言した」と述べている点は、「アレインの指導下にマサチューセッツの労働党は専ら硬貨政策やアンドルー・ジャクソンの背後に位置し始めた」とゆうシュレシンガー(Jr.)の見解を肯定するように思われる。

さてベッセンは「労働者はあらゆる銀行と特許会社との拒否を望んだ。ジャクソニアンは銀行地盤の拡大、すなわち純粹な資本主義の膨張にとつて本質的な貴族主義的独占の破壊をもとめた」と述べている。またドーフマンが結論的に、「labor radicalism と monetary reform との混同がある。monetary reform の目的——概して直接に労働の改善を疎外した——は labor を助けることではなくて、better business conditions and reform panics をつくること

であつた⁽¹¹⁾』といつてゐるのは、確かに眞実の一面を述べたものとして受けとれる。しかしながら、シュレシンガー(Jr.)の説くところは、労働状態の革新を中産的知識層の覚醒によつて基礎づけ、labor radicalismを強調することにおいてその氣運を動かしたとゆう歴史的現実の内容的把握にすぐれたものがある。

次に(B)の点の究明に移ろう。シュレシンガー(Jr.)は、「第二の労働党——一八三三年および三四年にアレンを知事に、シデウイクを下院に選んだ——は、一八三〇年および三一年の労働党より都市的、急進的、特殊的、決定的である⁽¹²⁾』と主張する。これに対しベッセンは、「労働者(workingmen)中の新たな投票者が、民主党とこの特殊な論争で結合した事實は、以後労働者が彼等の党として民主党を眺めたとゆう結論には決して導びかない⁽¹³⁾』と異説を述べてゐる。またドーフマンは、労働党の政綱が先ず取り上げるべき直接の弊害は、時間や賃銀や労働状態ではなくして、「商業社会の特殊な bagaboo と過剰な銀行紙幣である⁽¹⁴⁾』とその商業的性格を主張する。しかしシュレシンガーの見解に立てば、根底に確乎たる hard money 觀をもつが故に銀行戦に敏呼を送つたのであり、その目標は不徹底な矛盾をはらんでいたとはいへ、拒否教書を契機として、實質的にジャクソニアン・デモクラシーに労働者を包含し、他方過激な労働者は労働手段に訴えたのである。

(1) Dorfman, op. cit., p. 301.

(2) Schlesinger (Jr.), op. cit., pp. 141—142.

(3) Schlesinger (Jr.), op. cit., p. 155.

(4) Schlesinger (Jr.), op. cit., p. 142. また p. 155 に「とにかくする程に、都市の職人や労働者は紙幣論争に目醒めた。」

- (15) Dorfman, op. cit., p. 296
- (16) Schlesinger (Jr.), op. cit., pp. 148—154.
- (17) Dorfman, op. cit., pp. 297—298.
- (18) Dorfman, op. cit., p. 304.
- (19) Schlesinger, op. cit., p. 157.
- (20) Pessen, op. cit., p. 269.
- (21) Dorfman, op. cit., p. 300.
- (22) Schlesinger (Jr.), op. cit., p. 157.
- (23) Pessen, op. cit., p. 268. （以下Sullivan, op. cit., p. 578. 参照）
- (24) Dorfman, op. cit., pp. 300—301.

以上労働党とその指導者をめぐる事情を検討したのであるが、更に労働組合について吟味を加えよう。一八三一年の New England Association of Farmers, Mechanics and other Working Men は東部ニューイングランドの職人及び労働者の自発的抗議として記述されたが、ドーフマンは、顯著なのはジャーナリスト及び富裕な政治家であり、労働組合が一貫して明瞭にみえた経済的論争は自由貿易であつたと述べるが、シュレシンガーも、アレンが労働党の候補者として転向した⁽¹⁾、即ち free-trade workingman になつた⁽²⁾と主張している。ここでわれわれはカーマンの、「一八二八年と一八三二年の間、労働者が病気のための万能薬を求めたのは、労働組合運動ではなくして政治上の活舞台であつた⁽³⁾。」とする見解を想起する。またこれらの年（一八二八年頃）における参政権の拡張により、労働者が

経済上の解放を成就しないとすれば、何事も意味しないのである。然るに、ルーサー (Seth Luther) の万能薬は銀行制度の廃止や労働者の自称代弁者の選挙でなくて、manual labor school の設立であつた。⁵⁾ しかもムア (Moore) は労働救済の主要な道具として政治活動や組合運動を擁護したけれども、「かかる組織は、知識の獲得と思考の正確な習慣なくしては、無価値な一時的便法にすぎないと聴衆に訴えた。⁶⁾」のであつた。かくしてわれわれはシュレンシンガー (H.) が、「ジャクソニアンにとつて労働の問題は、労働者達の投票を動員するにあつた。」と云い、また「古い労働党の少数の指導者しか組合主義に多くの関心をもつていなかった。」⁸⁾とする見解こそ眞実を伝えていると見なければならぬ。

かくの如く前期労働党の活躍は、外見上は組合主義的、経済的であるが、指導者は政党的、商業的であつて、組合運動主義に徹底しえなかつた。一八三二年を境として、一方において保守的、商業的面貌を保持しつつも、他方において労働者の要求に歩調を合せてゆくやう矛盾せる現象を呈したのである。その例証を、「ルーサーは新資本主義を社会的濫用の故に攻撃したが、ムアはこの資本主義がすべての人に接近し易いものとなるべきであり、その目標は民主党の継続せる力を通じてのみ実現されると主張した。」⁹⁾とゆう事実に見出す。またカーマンが一八三七年の恐慌に先だつ不況は、労働党の分解後¹⁰⁾再び労働者を奮起させ不満な現状打破のため、政治へでなく労働組合主義へ、而も重要な武器であるストへ転向したと¹¹⁾見ていることも首肯される。

(一) Dorfman, op. cit., p. 302.

(二) Schlesinger (Jr.), op. cit., p. 91.

- (c) Carman, op. cit., p. 67.
- (4) Shannon, op. cit., p. 233
- (5)(6) Hugins, op. cit., p. 123.
- (7)(8) Schlesinger (Jr.), op. cit., p. 91.
- (9) Hugins, op. cit., p. 124.
- (10) Sullivan, op. cit., pp. 574—575 何故に第一回労働党が失敗したかを問うて、第一に、党そのものの性格と、官職のため
にそれを支持した候補者とであつた。その存在の四年間に、フィラデルフィアの elective office に一〇〇人の候補者を指名
し、支持したが、その職業別は次の如し。 workingmen (master, carpenter, shoemakers,...) 10; professional men 23;
merchants and manufacturers 53; no occupation 3; gentlemen 11; また p. 576 に失敗の第二の原因として労働者の階
級意識の temporary であつたことを挙げてゐる。

(11) Carman, op. cit., p. 67.

次に Locofocos について考察し結論の手引としよう。コモンズ (Commons) によると、タマニイ (Tamany) は
労働者に満足を与え、ニューヨークの労働者がジャクソン統治の銀行政策を支持した論拠と見なされる。而もヒュー
ギンスはシュレシンガー (Jr.) 「労働党と後の the Locofocos とは、ジャクソンニアン・デモクラシーの radical
fringe における反資本主義的労働運動の例」として引用したと主張する。

さて一八三六年に Tamany organization が銀行問題で分裂し、radical Locofoco と Whig の分離をみた。こ
の際タマニイは敗北したけれども、結果としてムアは当選した。われわれが氣附くことは、破れた Locofoco が過
激派であり、勝つた Locofoco が保守派であつたことである。そして前者はベッセン及びサリヴァンによつてジャ

クソニアンと考えられ、ムアは後者の典型として立現われる。そこでシュレンシガー(Jr.)が「Locofocoは労働組合運動から三人の指導者をえた。……一八三六年に裁判所が組合を打倒した時、Locofocoは組合運動の受領者になつた」と述べる時、このLocofocoは過激派と見做され、タマニイ独裁で育て上げられたミング(Ming)がおされた。しかし「他の人々は自己自身にその論争がふりかかつたと感じたが故に、政治に転向した普通の人々であつた。なお他の人々は気まぐれな知識人で、ジャクソン統治が政治の危急の感覚を与えた。」と述べる時、暗々裡にムアもその一人であつたろう。なお論を進めれば、カーメンが working and mechanics が Equal Rights Party the States of New York を形造るために Locofoco (Tamany Hall の labor and progressive offshoot) と提携した⁽⁵⁾と述べるが、ドーフマンは「この意味も第一に、wage earners problem より寧ろ financial business と関係があつた。」⁽⁶⁾とムアの立場を示している。更に Equal Rights Party は一八三六年の選挙に顯著な成功をおさめたが、やがて major parties によつて吞込まれた⁽⁷⁾とカーメンの述べた事実は何を物語るものであろうか。

一八三七年に独立国庫制度⁽⁸⁾(Independent treasury system)が制定された時、ヒューギンスによれば Locofocos は大統領を歓呼し、「purified Tamany Whigman を歓喜させた⁽⁹⁾」のであり、またシュレンガーは、東部を通じて independent treasury につゞくの闘争は、Jacksonian party におつて潜在せる radicalism を覚醒させた。……初期三〇年代の殆んどあらゆる radicals が官職に指名された⁽¹⁰⁾と主張するが、その radicals はすでに Whigs と Democrats にとり入れられた workingmen の性格であつた。かくして independent treasury は東部において、統治の側に common man を糾合した所以である。ホーフシュタッターが適切にも、特権を与えられた政治的支配力から自然

的経済秩序を取戻すことを目標としたのは、regular Jacksonian のみでなく、radical Locofoco school の立場である。⁽⁷⁾と述べている regular Jacksonianこそ、シュレシンガー(Jr.)の曖昧な敘述において意味したジャクソンの直系であり、radical Locofoco school のような漠然たる響をもつて用いられたのは、ジャクニアン・デモクラシーの亞流とも呼ぶべきで、実は過激派を指すものであつた。このように見てくるとわれわれは、シュレシンガーとヒューギンスやドーフマンの主張の間に本質的にいかなる差異があるかを決定するのに苦しまざるをえない。要するにわれわれはジャクソンおよびジャクソニアンが国民を把握せんとして示した政党的、政治的手腕をここに見出すべきであらう。

(1) Schlesinger (Jr.), op. cit. p. 191 一八三五年一〇月、ニューヨーク市の新に興つた radical Democrats は目捷の選挙に対する指名を通過するために Tammany Hall に会した。

(2) John R. Commons et al. (eds.): Documentary History of American Industrial Society (1910), V, pp. 204—205.

(3) Hugins, op. cit. p. 106.

(4) Hugins, op. cit., p. 119.

(5) Schlesinger (Jr.), op. cit., p. 199.

(6) Schlesinger (Jr.), op. cit., p. 198.

(7) Carman, op. cit., p. 79.

(8) Dorfman, op. cit., p. 301.

(9) Carman, op. cit., p. 79.

- (10) 一八三七年九月四日のヴァン・ビューレンの教書において、恐慌の分析の結果、銀行預金制度の拒否を宣言した。
- (11) Hugins, op. cit., p. 119.
- (12) Schlesinger (Jr.), op. cit., p. 261.
- (13) Hacker, op. cit., p. 338.
- (14) Hofstadter, op. cit., p. 61.

五、結 論

アメリカン・デモクラシーは fine idea であるが、産業革命は grim reality であると云われるように、common man が必要としたのは政治的平等のみでなく、経済的平等でもあつた。こうした新たな要求の時代、国民的青春の時代に、国家が形成されようとしていたのである。⁽²⁾ 労働階級 (laboring class) だけでなく、enterprising (journeymen, master, manufacturer, merchant) ——これらすべての人々が貴族主義的組織(新国家の将来において享受すべき機会を少数の人のすべてに否定する)に対して闘争していたのである。⁽³⁾ ハッカーは、彼等 (Wright, Leggett, Skidmore) の一般的要求以上に、初期都市同業組合グループの指導者および追隨者の継続せる中産階級帰家本能を表わすものはなかつたと述べ、結論的に、これがジャクソニアン・デモクラシーの平等主義的勸告に熱心に耳傾け且つ速やかに答えた時期および国民の特徴であつたことを指摘している。⁽⁵⁾

ところで、ドフソーンが、「hard money Jacksonian はアダム・スミス (Adam Smith) の追隨者でなく、英蘭銀行とリカード (David Ricardo) のそれである」と述べているのは、「『歐洲も中産階級観——経済的自由主義、free education 自由放任主義——から発生した弊害の批判に声高な改革者をもつた』⁽⁷⁾と社会立法の重要性を云うカーマ

ンと説を同じくしている。然しシュレンガー (J. H.) はジャクソニアンの第二の着想の源泉は、アダム・スミスの国富論によつて覚醒された自由主義経済思想であると述べ、ここでもカーマンと対立を示しているが、われわれはホーフシュタッターの言にきくべきであらう。すなわちジャクソニアン運動は、機会の束縛——政治活動に起源をもつ——を除くことにより、一層拡大し伸長する機会えの一般の要望から發展した。かくして、若干の制限と共に本質的には自由放任運動、政治と商業との分離の試みであつたというホーフシュタッターの見解が事態の真相をついていと思われる。自由企業の規則は、社会の自然的秩序のために、党派的法律の阻害的影響、諸々の独占、蓄積ある偏ばな社会を破壊する政治行動となつたのである。⁽¹⁰⁾ しかもモリスはチエサビークのストにおけるジャクソンの行動を研究して、industrial labor に関する疑惑を取り除き、ジャクソンが資本の結合以上に労働の結合を望んだこと、ストとゆう武器を是認した証拠はないことを明かにし、またドーフマンは、ジャクソニアンの時代において後の階級闘争の概念は読みとることが出来ない。その運動は法律制定の特権を削除し、保護した意味で自由な運動であつた。⁽¹²⁾ 結局、ジャクソニアン・デモクラシーからの主要な遺産は militant labor government の成長ではなくして、economic exploitation of a continent であつた。⁽¹³⁾

このように考察する時、やや東部的性格において論ぜられているとはいへ、ドーフマンが結論するように、ジャクソンはシェフアーニンも opulent holders, recipients of government favors or privilege に対つて farmer, mechanics, merchants, other "workingmen" ——あらゆる所謂 "industrious" の擁護者と考へられたのである。シュレシンガー (H.) の敘述がともすると東部労働者のひいきに傾いたジャクソンを強調し、それを主導的要因として

ジャクソニアン・デモクラシーを理解せしめた点があり、拒否教書を階級闘争と結びつけたと思われる箇所もあるが、ホーフシュタッターが指摘するように、⁽⁴⁶⁾それは確かに radical leveling movement の哲学ではなく、それは如何なる Utopian Premises にも続行するものでなかつた。われわれはその例証を、「完全な平等は不可能である。差別は常に存在する。」また「fruits of superior industry, economy and virtue の享受は公正に行われるべきである」というジャクソンの言に見出すことができる。然るにシュレシinger (Jr.) は「make the rich richer, the potent more powerful」の句を強調して誤解を招来したものと見るべきであらう。

最後に、研究者の誤解の原因は、「Workingmen」の広義における使用を充分に理解しえなかつたことにあると思われる。この言葉のもつ広い意味を正しく把握することは、アメリカにおける、デモクラシーといわゆる労働運動との関係について理解の鍵を与える。即ち、この概念は反資本主義的というよりも寧ろ、反貴族主義的なものであつた。これがヒューマニズムと商業的要素とを結合したのである。⁽⁴⁷⁾なんといつてもアメリカ社会は止まることのない流動性をもつていた。当時の擡頭する中産階級の必要を表明し、その計画を明瞭ならしめたものこそ実にジャクソニアン・デモクラシーであつたと見なければならぬ。

なお、ジャクソンの時期の労働者の投票の実証的研究にもとずき、industrial vote より不斷にジャクソンを支持したのは、東部諸州の back country section における small farmers であつたとする所論、⁽⁴⁸⁾また eastern workingmen はボストンの workmen であつて、western countries の yeoman であつたとする主張、更に南部のプランターの状態など、こうしたいろいろの問題について今後の資料的研究に俟つところ大なるものがあるが、直接資料不充

分のため文献的研究におわつたことを詫びつつ大方の御叱責を乞う次第である。

(1) Hale, op. cit., p. 144.

(2) Hacker, op. cit., p. 338. "Seth Luther's address to the Working Mens of New England." (1832). 「われわれの耳に National wealth, National glory, American System, American Industry の呼びこよつて絶えず一杯である。此の叫びは、彼等の手中にあるあらゆる手段によつて、われわれの賃銀を切下げようとする人々、外国人の移住を誘惑してアメリカ市民を低賃銀で働かせたり、American Industry & American System を維持するためにヨーロッパへ代表を送る人々によつて奉持されている。ニード・インダストリーの fellow citizens 即ち farmers, mechanics, laborers, われわれはこれらの禍害を長い間堪えてきた。われわれはあらゆる政党によつて欺かれた。われわれはわれわれの business をわれわれの手中にとらねばならぬ。われわれは覚醒しよう。われわれの cause は truth—justice と humanity の cause である。」

(3) Hugins, op. cit., p. 125.

(4) (5) Hacker, op. cit., p. 337.

(6) Dorfman, op. cit., p. 304.

(7) Carman, op. cit., p. 64.

(8) Schlesinger (Jr.), op. cit., p. 315.

(9) Hofstadter, op. cit., p. 55. また Hale, op. cit., p. 143. 「トランスンと与党の改革はすべて、意図されたように運営されなかつた。事実、その若干は反対の方向に働いた。banking monopoly を攻撃することにおいてジャクソニアンはすべて他の business corporation—competitive basis に操作される限りへ自由な放任をゆるした。」

(10) Cf. Schlesinger (Jr.), op. cit., p. 316.

(11) Morris, op. cit., pp. 66—67. 一八三四年一月十六日、ジャクソンが Irish laborers のストを鎮めるべく連邦軍を Chesapeake 及び Ohio Canal の線に送ったもので、彼は明かに大統領職の拡大された権力についての彼自身の概念に従って行動したことが若干の研究者により解明された。

(12) Dorfman, op. cit., p. 305.

(13) Hugins, op. cit., p. 128.

(14) Dorfman, op. cit., pp. 305—306.

(15) Hofstadter, op. cit., p. 60.

(16) Cf. Dorfman, op. cit., p. 305.

(17) Morris, op. cit., p. 68.

(18) Pessen, op. cit., p. 274.